柏江物語 その二

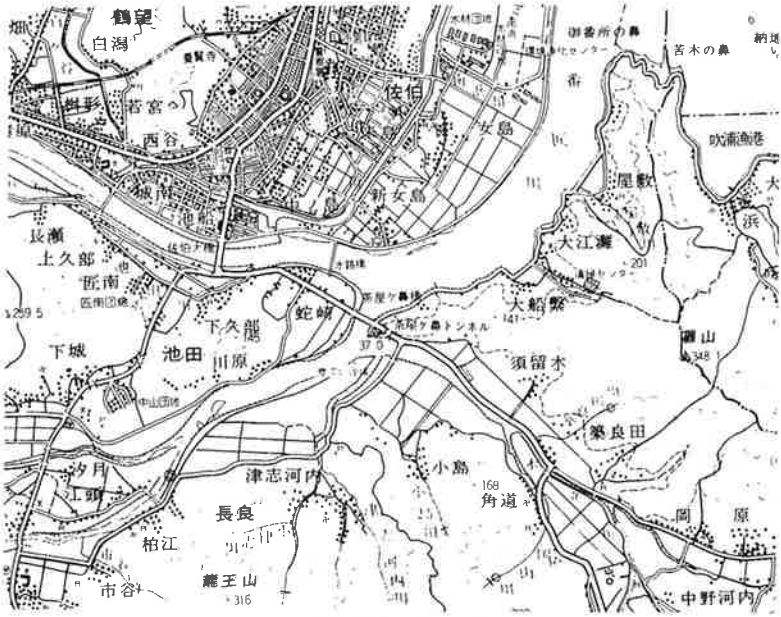
岩田 トヨ子
（会員・佐伯市柏江）

柏江は天領でありました。他の所は地領と言って区別していました。

柏江は、堅田川の河口に出来た港で、昔は佐伯地方の唯一の港でしたから、佐伯地方の各所からの農産物や山の産物も此処に集められて、大阪方面に船で積み出されました。そして、帰りの船には日用品が積み込まれて、柏江で荷揚げするものですから大変な賑いでありました。

盆踊りの口説に

土地は天領公儀の支配　藩の御城下佐伯の町を
一里へだつる柏江港　諸国諸州の船集まりて
朝の入荷や夕の積荷　波止にや貨物の山積みあげて
――中略――
呉服反物絹錦反地　唐津唐金塗物細工
障子ふすまの立物までも　ありとあらゆる品詰込み



柏江地図

て

――後略――

と唄われて、大変賑わった町になっていました。

天領になったのは、毛利高政が、慶長六年、佐伯藩主として此処を治めるようになった時、弟の森九郎左衛門という方が、なかなか才のあった方でしょう。自分の領地として貰った柏江港に目をつけました。貰った土地はまだほかに床木・津志河内・汐月・泥谷・波越・石打・西野・府坂・棚野を含めて十ケ村でありました。そして自分の住所を柏江の野中という所に定めて、城戸をつくりました。後に、毛利氏の三代目の後継をめぐりいざこざが起りました。この時、九郎左衛門の主張が通らなかったので、責任をとって退くことになりました。その時治めていた十ケ村二千石を幕府に献上して、幕府から二千石を貰って江戸に住み、旗本になりました。その時から、献上十ケ村が天領になったのです。

その天領の人達は大変な勢いをもって、地領の人達を見下した行いが目立っていたようです。

一例をあげてみましょう。地領では、一般の人には厳しい節約の仕方を申しつけて、ちょっと贅沢なものは皆禁止禁止で貧しい生活を強いられておりましたが、柏江では柄物の着物を着て、蛇の目の傘をさしても何のおとがめもありませんでした。

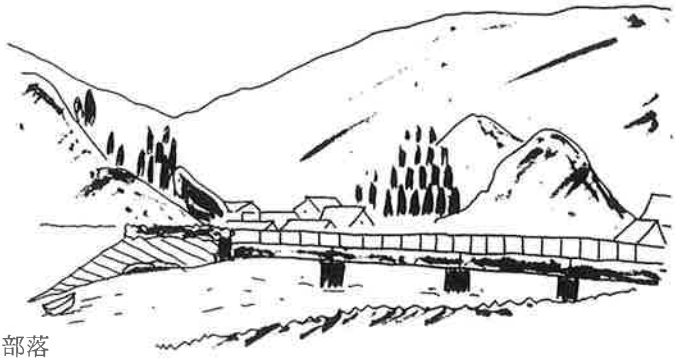
柏江港は、九郎左衛門が目をつけたように、川底が、長竿の金突きで底を探るという程深く、大坂通いの千石船が交替に五六艘はいつでも繋がれているほかに、商い舟やかき取り舟も沢山集まって、それはそれは大変な賑わいになっていました。

こんな柏江にも悲しい出来事がありました。

柏江には前述のように千石船が沢山ありましたが、神社の鳥居や狛犬などのほか、村に寄進した時の名前を彫り込んであるのを見たり、また、聞き覚えによる船の名前は、天福丸・亀一丸・幸吉丸・豊栄丸・福寿丸・あたご丸等、屋号として記憶がありますが、十五六艘か二十艘ぐらいあったのではないでしょうか。その船にまつわる一つの不幸の記憶を辿ってみました。

ある年、天福丸という船の舟子が、大坂から帰る時に荷物としては軽いけれど、それはそれは重荷のコレラという伝染病を持って帰りました。

さあ大変。これがまたたく間に拡がって、沢山の病人



柏江部落

が出ました。村ではみんなが恐ろしがって居りましたが、手のつけようもありませんでした。

鴨池という村はずれに小屋を建て、これを病人小屋と呼んでいました。そこでは、毎日毎日沢山の人達が死んでいきました。亡くなった人は、地下に八尺も掘った穴に埋め、これをコレラの墓と呼んでいました。

そのあくる年に、また、今度は赤痢を貰って帰りました。今度も大変な騒ぎで、改めて造った病人小屋にほうり込まれて、手当の方法も充分に届かず、設備の粗末さも手伝って沢山の死人を出しました。この年を赤痢年と言うようになりました。

度重なる疫病に、舟乗りや村の人達は困まり果てての神頼みで、船の神様とあがめてきた金比羅様の御遷座を願っておすがりしようという話し合いができました。

柏江部落から丑寅（うし）にあたる鬼門除けとして龍王山の方角を選んで、金比羅様を勧請致しました。

神社の御殿は、お神楽が舞えるくらいの広さを持ったお社でした。お詣りの多いお宮でしたが、高い所にあった為に、ある年の台風で大被害を受けました。その破損修理も出来ず、再建出来ないままになっています。

今は祠があるばかりですが、十月十日がお祭り日です。御縁日には、区長さんが御神酒をあげにお詣りしたり、信心深い人が時折りお詣りするくらいになりました。

あれから金比羅様のお陰でしょうか、この柏江には悪い病気はなくなってしまいました。

有り難いことでございます。

南無金比羅大権現さま　　再拝